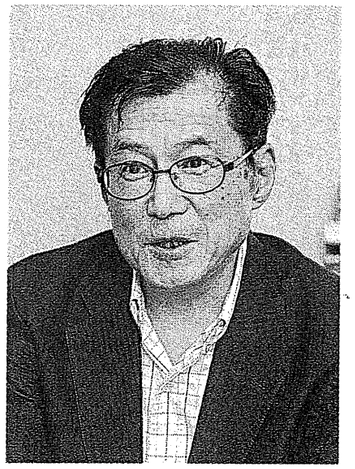
THE KENSETSU TSUSHIN SHIMBUN
建設通信新聞
Architectures,Constructions & Engineerings News(Daily)
2013年（平成25年）8月23日（金曜日）（第三種郵便物認可）

建築専門以外の読者も意識

「参加型の誌面」目指したい

日本建築士事務所協会連合会が会誌の名称を『Argus－ey e』（アーガス・アイ）から『日事連』に変更したのが2011年4月号。10年10月に会誌編集専門委員会の委員長に就任していた森野美徳氏は、名称変更に伴って表紙デザインを含め誌面を刷新した。「特集」は建築を中心に置きながらも、一般の人が読んでも十分に楽しめる内容になっているのが特徴の1つだ。「設計実務情報が満載」というイメージを、良い意味で裏切る会誌となっている。



会誌編集専門委員会委員長

森野（もりの） 美徳（よしのり）さん

編む人

日本建築士事務所協会連合会 『日事連』

4つの基本姿勢と写真へのこだわり

――基本的なスタンスは

――体制は

「日事連の常置委員会の1つである広報・渉外委員会の中の専門委員会という位置付け。委員は全員で7人。2カ月に1回程度開催している。専門委員会で『特集』のテーマなどを検討し、編集事務所が実際に作業するという体制をとっている」

「2011年4月号から誌面を刷新した。基本姿勢として4点ある。1つは会員の情報共有、相互交流の媒体とすること。2つ目は、日事連という団体を広報し、その社会的地位を高めること。この2つを特に意識している。3点目は、日事連と単位会の取り組み・課題を主要テーマにする。4点目が、行政情報など会員の業務に役立つ情報を掲載する」

「また、この2年間は、建築の専門家が読んでも専門以外の人が読んでも『見てみようかな』『読んでみようかな』と思ってもらえるようなつくり方を意識的にやってきた。専門家以外の方にも読んでもらい、建築や建築士事務所にアプローチしてもらえる内容にすることを目指している」

「4月号の特集では、建築士事務所全国大会の開催地である伊勢に焦点を当て式年遷宮や街並み、まちづくりなどを特集した。この特集号だけで相当のことが分かる内容になっている。斜め読みするだけでも楽しいと思う」

「もう1つは、表紙も含めて写真を充実させたいと取り組んできた。私が自ら撮りにいったりもしている。写真に限らず、実際に現地に入り、自分の目で見、自分の耳で聞き、感じ、考え、そこから何かを引き出すことが大事だと思うし、実際にやってきている」

単位会情報のプラットホームに

――苦労、悩みは

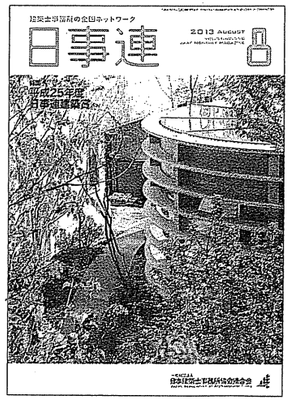
「例えば、7月号で『コンピューティング・デザイン』というBIMの特集をやった。東京の大手組織事務所にとっては違和感がない話題だが、地方の個人事務所までには浸透していないテーマの1つ。地方の事務所でも分かる切り口をどう入れるか、知ってもらい、次のステップにつなげてもらうかを考えた」

「いま、大きな課題と考えているのは、現在『単位会だより』を設けているが、単位会情報のプラットホームとして十分に機能していない点だ。強制参加や順番制ではなく、全国の会員にぜひ知ってほしいと思ってもらう機運を醸成していきたいと考えている」

「また、所長・社長のところで止まらないで、全スタッフにも読んでほしいと考えている。このことと関連して、単位会ではなく構成員事務所のスタッフも含めた参加型の誌面にしていきたい。その中には特集の感想なども掲載できればと思う」

「建設コンサルタンツ協会では、連載が単行本になったりしている。そういう連載を考えることも宿題の1つだと思う。その連載の中に事務所のスタッフの寄稿などが掲載されればと思う」

建築の楽しさ伝える



メーンの「特集」のほか、行政を含む建築界の動き・情報などを伝える「日事連発信」や日事連活動を報告する「日事連ニュース」「単位会発信」「連載」などで構成する。8月号の「特集」は、2013年度日事連建築賞の紹介。カラー写真と設計コンセプトが建築の楽しさを伝える。「日事連発信」は、建築5会の協力で設立された国際建築活動支援フォーラムが13年度の助成対象者を決めたのを受け、同フォーラムの小倉善明理事長にインタビューした。このほか、単位会だよりでは、大阪会の景観まちづくりへの取り組みを紹介している。